



スクールカウンセラー

吉澤克彦

令和2年6月

漢字が覚えられない

「漢字が苦手」「問題文を読むのも一苦労」という相談を受けたことがあります。「10回書いても覚えられない。私だめなんです」親からも「真剣にやってない！なまけだ」なんて言われちゃう。

計算問題や社会や理科の学習、生活全般には、特段問題がないのに、漢字の読み書きだけが不得意。たいてい、練習が足りないとか、まじめにやっていないからだと思われがちです。しかし、練習量ややる気の問題ではなく、ある弱さを持っている場合があるかも知れません。

下の「海」という漢字を見てください。



だれもが、どの字も「海」と読めると思うかも知れませんが、これらを同じ漢字だと認識しづらい人もいますのです。例えば、白い紙に黒い文字だとコントラストが強すぎて読みづらくなる人がいます。その場合、薄い色つきのシートを重ねたり、タブレットを用いたりすることで克服する場合もあるのです。

右の図は、有名なルビンの壺という絵です。多くの人はず、中央の壺を認識します。ですが、よく見ていると白い部分が向かい合った顔に見えてきます。みんなが見ているものとは別のものを先に強く認識する特性の人もいますのです。



字が読みにくいこと、他のことに意識が行ってしまうことで、先生の話にも集中できなくなり、分からなくなってしまうたら他の能力も伸ばすことができないかも知れません。何が不得意で、その克服には何が必要なのか。それを、一人一人について考えていくのが、特別支援教育でもあります。苦手だと思っていること、できないとあきらめてしまっていること、本当にそれでいいですか？特性や個性について一緒に考えてみませんか。

コラム：村上春樹

先回の続きで、読字障害（ディスレクシア）について、もう少し。村上春樹の小説『1Q84』に、「ふかえり」という高校3年生が登場します。彼女が、ディスレクシア。本を読むのにとっても時間がかかるのです。でも、ある時『平家物語』を朗々と暗唱します。テープを何度も聞いて覚えたのです。

読み書きが不得意な彼女は、周りのサポートを受けて、「空気さなぎ」という小説を発表し、文学新人賞に輝く。ハンディを周りの支援で克服したのです。

このように、ある分野が苦手ということも一つの個性として捉え、サポートを受けながら、他の部分を伸ばして、立派に成長することはできるのです。